

第6回基礎学習理論研究会

『無気力の心理学』（波多野誼余夫・稲垣佳世子）第4～6章

奈良教育大学 中澤静男

本書では効力感を「自分が努力すれば、環境や自分自身に好ましい変化を生じさせうる、という見通しや自信をもち、しかも生き生きと環境に働きかけ、充実した生活を送っている状態」としている。そして、効力感の獲得の前提として自律性の感覚、自らの努力や行動のコントロール感が不可欠であると述べる。また、効力感を育てる条件として仲間との交流を指摘し、協同的な学習の効果を例示している。さらに、構造化された知識、スキーマにも言及し、熟達することでスキーマも発達し、自他の行動をスキーマにそって評価するようになることで、人間の実存的な要求の様相である創造と愛と自己統合がもたらされることから、効力感の問題を人間の実存的な要求と関連づけて考察することの重要性を訴えている。

以上、効力感獲得の前提、育てる条件、人間の実存的な要求と効力感の関連について、次の2点から考察を加えたい。一つ目に熟達を可能にする条件に関して、二つ目に協同的な学習がもたらす効果の要因についてである。

一つ目の熟達を可能にする条件についてである。著者は、自分の行動やその結果が自分なりの内的な枠組みから評価できるようなスキーマを発達させることができるという意味において誰もが熟達者になれる、そのためには粘り強く努力する必要性を指摘している。著者が述べるように「ごほうび」が興味を低下させ、外的評価が向上心を低下させるのであれば、熟達者が粘り強く努力を継続できた要因に疑問が生じる。熟達者の例として職人を挙げているが、職人は熟達するまで、それ以外の仕事で報酬を得ながら、努力を継続してきたのではない。職人集団の一員として、初めは周辺の仕事に携わり、先輩の職人や親方の技術を模倣することで次第に中心的な仕事を担う技術を身につけてきたはずである。そのプロセスの中にごほうびはあったであろうし、先輩職人や親方からの外的評価があったはずである。その上でスキルの向上と共に発達したスキーマが内的評価である自己評価力の獲得につながり、仕事に対するコントロール感の獲得、そして効力感の獲得につながっていくものと捉えることができるだろう。一言で効力感といっても、その内容やレベルは多様であり、心理学的実験のような、個人にとって価値の低い場面で獲得できる効力感と、職人の仕事のような個人の生きざまに関係する場面において、時間とともに形成されていく効力感を同列に扱うべきではないだろう。

二つ目に協同的な学習の成否の原因についてである。著者は協同的な学習の効果として、自信が増すことと人生を左右するのは運ではないと考える傾向、一生懸命努力すれば結局力がつくものだという考え方を指摘している。これらの効果をもたらす要因を考えるにあたり、職人の熟達過程における先輩職人や親方との交流と協同的な学習の場面を比較したい。そこに共通しているのは、小さな効力感の積み重ねである。仕事の良し悪しもよくわからない徒弟が、先輩職人や親方にほめられることで、仕事の成否を判断できるようになっていく。先輩職人や親方のプラスの外的評価や「ごほうび」がスキーマの発達を促したのである。協同的な学習において、著者は仲間とのあたたかいやり取りを強調しているが、そのやり取りは、仲間との間に形成された文脈に即した肯定的な意見のやり取りであるはずである。全否定ではなく、深めたり前進させたりするような意見のやり取りが協同的な学習を個人にとって好ましいものにする。この前向きなやり取りは「小さな効力感」の源泉であり、その蓄積が著者が指摘する協同的な学習の効果を生むのである。

以上のことから、効力感の獲得にとって重要なものが明らかとなる。親方や先輩職人による徒弟を一人前にしてやろうという厳しくも暖かい接し方やまなざしであり、協同的な学習においては仲間意識である。著者は効力感の問題を人間の実存的な要求と関連づけて考察することの重要性を訴え、この章を結んでいるが、実存的な要求のなかでも「愛による自己実現」が特に重要なのではないだろうか。